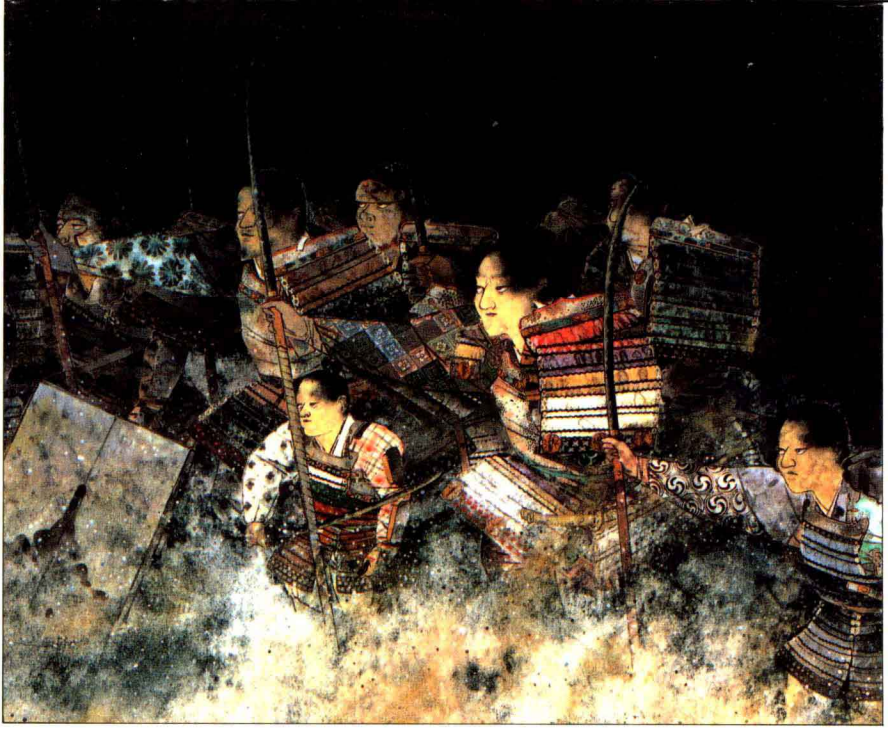


平家物語

牧野和夫◇小川国夫

新潮古典文学アルバム

平家物語

牧野和夫・小川国夫

苏工业学院图书馆
藏书章

新潮古典文学アルバム

編集・執筆　牧野和夫（実践女子大学教授）
エッセイ　小川国夫

資料提供協力者

赤間神宮
安楽寿院
厳島神社
井上員男
永青文庫
お茶の水図書館　成簣堂文庫
鹿島建設
神奈川県立　金沢文庫
神奈川県立博物館
観世栄夫
義仲寺
京都国立博物館
宮内庁
宮内庁書陵部
慶応義塾大学　三田情報センター
光明寺
國學院大学図書館
国立公文書館　内閣文庫
胡宮神社
国立能楽堂
埼玉県立博物館
寂光院
聖衆来迎寺
称名寺
神護寺
静嘉堂文庫
泉涌寺
大東急記念文庫
知恩院
中央公論社
中尊寺
天理図書館
東京国立　近代美術館
東京国立博物館
東大寺
徳川美術館
友枝喜久夫
中野幸一
名古屋市　蓬左文庫
奈良国立博物館
仁和寺
根津美術館
林原美術館
福岡市美術館
藤井永観文庫
藤田美術館
平凡社
便利堂
ボストン美術館
本願寺（西）
前田育徳会　尊経閣文庫
前田するゑ
満福寺
妙法院
山種美術館
吉川弘文館
龍谷大学図書館
霊松寺
六波羅蜜寺
早稲田大学　演劇博物館
早稲田大学図書館
真砂早苗

写真撮影

相田昭
小嶋三樹
榊原和夫
野中昭夫
真砂早苗
松藤庄平
宮寺昭男
吉原暢雄

新潮古典文学アルバム　13
平家物語（へいけものがたり）

一九九〇年五月一〇日発行
一九九三年五月三〇日三刷
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
電話（営業部）03―三二六六―五一一一
（編集部）03―三二六六―五四一一
振替　東京四―八〇八
印刷　大日本印刷株式会社
製本　加藤製本株式会社
＊価格はカバーに表示してあります
乱丁・落丁本は、御面倒ですが、小社読者係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。
無断転載を禁ず。

©SHINCHOSHA,1990　Printed in Japan
ISBN4-10-620713-3 C0391

新潮古典文学アルバム　平家物語　目次

霊に憑かれた琵琶法師　小川国夫　2

平家物語　牧野和夫　9

Ⅰ　後白河院　9

Ⅱ　『平家物語』の成立　33

Ⅲ　『平家物語』の世界　49

平　清盛　50

木曾義仲　70

源　義経　80

源　頼朝　94

建礼門院　97

『平家物語』略年表（付同時代作品年表）　牧野和夫　104

『平家物語』関連作品　109

『平家物語』を読むための本　111

カバー絵＝前田青邨「知盛幻生」

編集＝木挽社

平家物語

牧野和夫
小川国夫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

平清盛画像（「天子摂関御影」大臣巻）。中納言から大納言、ついには従一位太政大臣の位をきわめた黒束帯姿の清盛。画僧豪信の筆（鎌倉末期、宮内庁書陵部蔵）

→（前頁扉）厳島神社大鳥居（広島県佐伯郡宮島町）。推古天皇の創建（五九三）と伝えられる。清盛が安芸守に任ぜられ（一一四六）てから、平家一門の篤い帰依の対象となった。清盛が今に残る社殿の構想を立て、一門が造営をすすめた。平家滅亡の後も、頼朝や朝廷の崇敬を受け、隆盛は今日まで続いている

霊に憑かれた琵琶法師

小川国夫

日本の多くの小学生がそうであるように、私もまた平家物語の英雄たちを最初は絵本の中に見いだして、胸をはずませた。やがて中学生になって本文を教えられてみると、〈那須与一〉はほぼ絵本の中で見た通りだったけれど、〈忠度都落〉となると、この段にただよっているのは少年には未知の気分であり、心惹かれながらも充分には解らなかった。

ただし痛切に解ったこともある。戦争下の日本の都市の運命に似て、京都が焼け野原になっていることだった。私もまた、灯が消えて荒んだ灯火管制下の街に住み、死という声におびやかされていたから、そうした現在と平家壊滅の昔とを結びつけて、唐突とも思わなかったのだろう。〈前途程遠し、思を雁山の夕の雲に馳す〉という忠度のたからかな朗詠は、特攻隊員の歌声のようにも聞きな

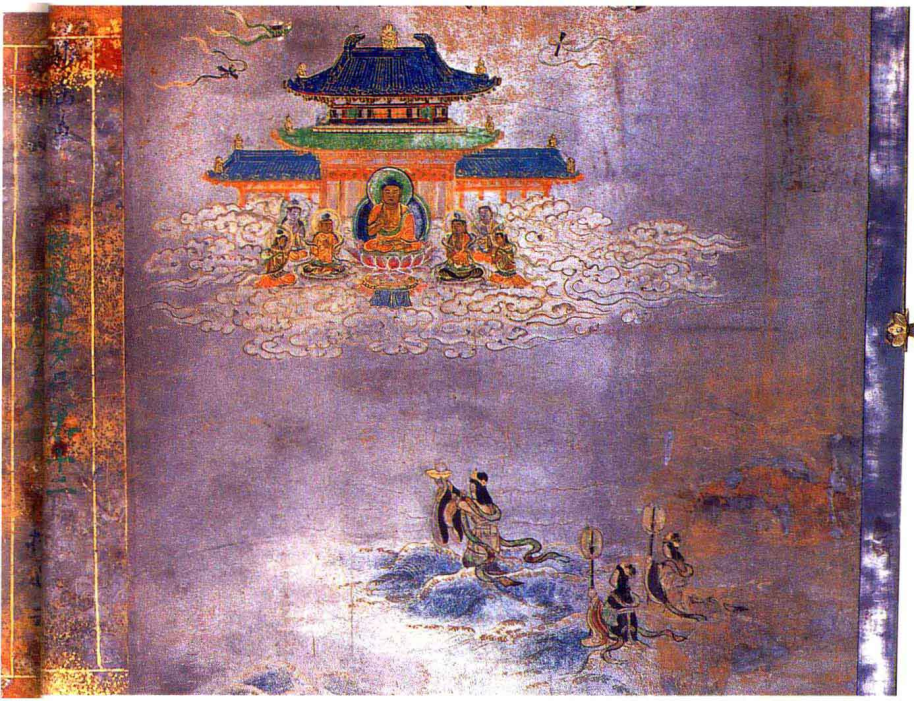
蓮華王院（三十三間堂）。京都市東山区。後白河院の御所・法住寺殿跡。院の勅命を受けた清盛が造営（一一六四）にあたった。多くの堂を配した壮麗なものだったというが地震で倒壊（一一八五）。現在の本堂は文永三年（一二六六）に復興されたもの

平家が屋島、壇浦へと流浪していく分け目の合戦となった一の谷古戦場。団地群におおわれる現在の風景

された。ただ、今想えば不思議なことに、京都を焼き払って賊となってしまった忠度が、肩身のせまい思いをしていることだけは充分に解らなかった。忠度は自らの定めをどう眺めていたか、俊成は歴史をどう観じていたか、その辺に少年の想像はひろがって行かなかった。敗残の濃い闇の中に、〈さざなみや志賀の都はあれにしをむかしながらの山ざくらかな〉と歌う廃墟の美が、慰めとあこがれの意味を帯びることが解らなかった。だから、かりに夢の中で私が琵琶法師になったとして、このくだりを歌ってみろと言われたとしても、歌えるわけはなかった。

平家物語を読むなら、歌わなければならない。節回しを習う習わないは別として、読み進んでゆく気持の中で歌わなければならない。平家物語を解釈するということは、その内容と読み手の肉声とが結びつくことなのだろう。

〈敦盛最期（あつもりさいご）〉を考えてみよう。これも中学生だった私が、教室で習ったくだりだけれど、その内容に接近する手がかりが、実は身近かにあった。というのは、私の住む家の東海道をへだてた真向いには浄土真宗の寺があって、ここは熊谷直実（くまがえなおざね）の創建にかかわり、しかも彼の子孫が代々住職を継承しているということで、熊谷家がつかさ



どる蓮生寺であったから、本文の中にある〈それよりしてこそ熊谷が発心の思はすすみけれ〉という一行も、この眼前の寺につながってくるのか、と考えたのであった。その上この蓮生寺には、直実の刀が相伝されているとのことだったから、少年だった私は住職に頼んで、その寺宝を見せてもらった。私に鑑定などできようはずはなかったけれど、住職は説明して、上野の博物館で見てもらったところによると、これは平安期の作で、元は長刀であったと考えられる、とのことであった。

〈敦盛最期〉は平家物語全篇の中でも、特にもの思わせるくだりだ。その第一は、戦争の殺戮への反省が、悲しい夢のように書きこんであることだ。少年敦盛を組み敷いた直実は、わが子のことを思い出して、〈小二郎がうす手負うたるをだに、直実は心苦しうこそ思ふに、此殿の父、うたれぬと聞いて、いか計かなげき給はんずらん〉と惑い、〈熊谷あまりにいとほしくて、いづくに刀をたつべしともおぼえず、目もくれ心もきえはてて、前後不覚におぼえけれども〉という状態になる。言うまでもなく、ここで苦悶しているのは父性愛なのだ。戦争において懊悩するのは父性愛ばかりではないにしても、平家物語には特に、虐待される父性愛の文学の性質がきわ立っている。

厳島神社廻廊。社殿は平安時代の寝殿造、当時の貴族住宅を神社建築に移したものという。本殿を中心に拝殿、祓殿、高舞台、平舞台…などが273メートルにわたる長い廻廊によって結ばれている

平家納経「提婆品見返し」。清盛をはじめ一門が法華経ほかを各1巻ずつ書写して厳島神社に奉納したもの。金銀をちりばめた豪華な装丁（国宝、厳島神社蔵）

知盛の場合もそうだ。一の谷の戦で、彼はわが子知章を戦死させてしまう。知章はわが身を犠牲として父の危難を救ったのだ。ようよう生きのびて舟に落ち着くことができた知盛は、息子の欠落を意識して、茫然としてしまい、こうつぶやく。〈いかなれば子はあッて、親をたすけんと敵に組むを見ながら、いかなる親なれば、子のうたるるをたすけずして、かやうにのがれ参ッて候らんと、人のうへで候はばいかばかりもどかしう存じ候べきに、我身の上になりぬれば、よう命は惜しい物で候ひけりと、今こそ思ひ知られて候へ〉。あるいはこのくだりは父性愛を裏側から見たと言えるかもしれない。愛されるに値しないのに愛されただらしない父の慚愧の念に堪えない状態を描き出している。文章の乱れの少ない平家全篇の中で、めずらしくここで言葉が乱れているのも、そのまま心の乱れのように受け取れる。〈いかなれば子はあッて〉とか〈いかなる親なれば〉ととり乱す言い方も、これはこれで名文句でもあり得る。そして、結局は、こうした〈いかなれば〉の疑念が、この物語を貫く主題につながって行くのが感じられる。

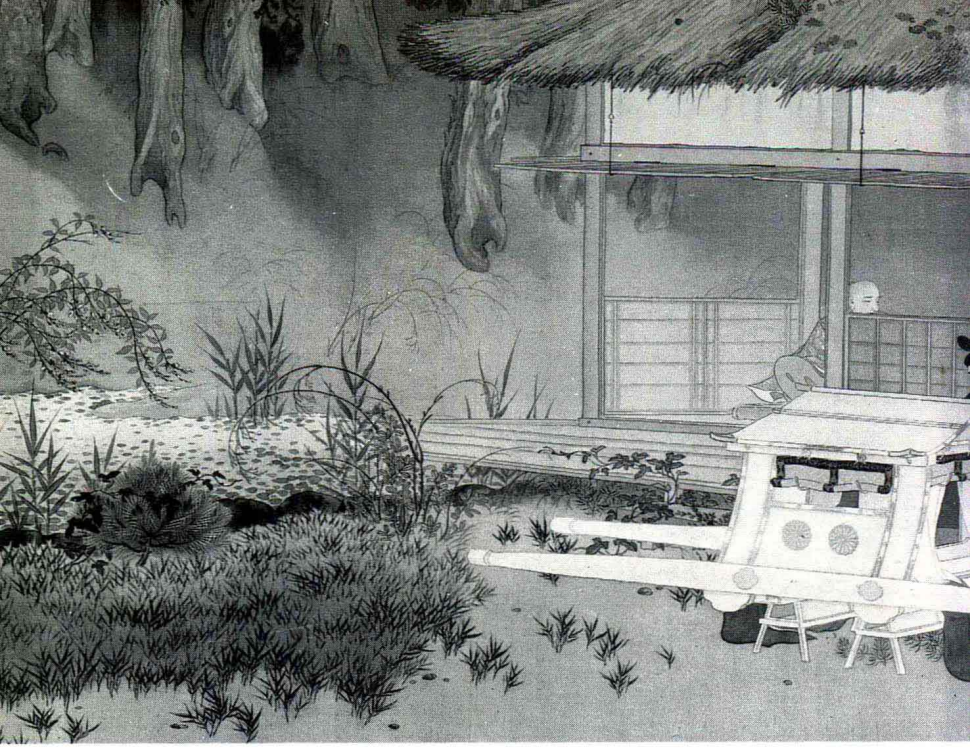
平家物語では、この主題をかりに無常と名づけているかのように思われる。いみじくも熊谷直実は、極めて劇

「大原御幸」（全六段の五段、部分）。下村観山筆、一九〇八年。清盛の娘徳子（高倉天皇中宮・安徳天皇の母）が壇浦で源氏方に助けられて後、二十九歳で出家、大原寂光院で一門の冥福を祈っていた日々、突然、後白河院が夏草の露をふんで訪れた…（東京国立近代美術館蔵）

的な情況において、それを強く示唆して、やがて戦没者慰霊の人となる。勿論敵の精霊も味方の精霊も、彼においては区別はなかった。そこで私が飛躍して思うことは、なぜ熊谷直実が平家物語の作者ではないのかということだ。彼こそその資格を具えているではないか。しかし、周知の通り、熊谷直実を平家物語の作者とする伝説はどこからも聞えてこない。

直実がその資格に欠けるところありというなら、それは彼が平家ではないということに違いない。平家物語は平家一門によって語られなければならないとは信仰に似たしきたりだったのではないか。その語り手である琵琶法師たちは平家と称ばれたし、彼ら平家たちの歌詞は一字一句にいたるまで動かしてはならない、能などにして舞台に乗せるにしても、平家が語るままでなければならないとされた。

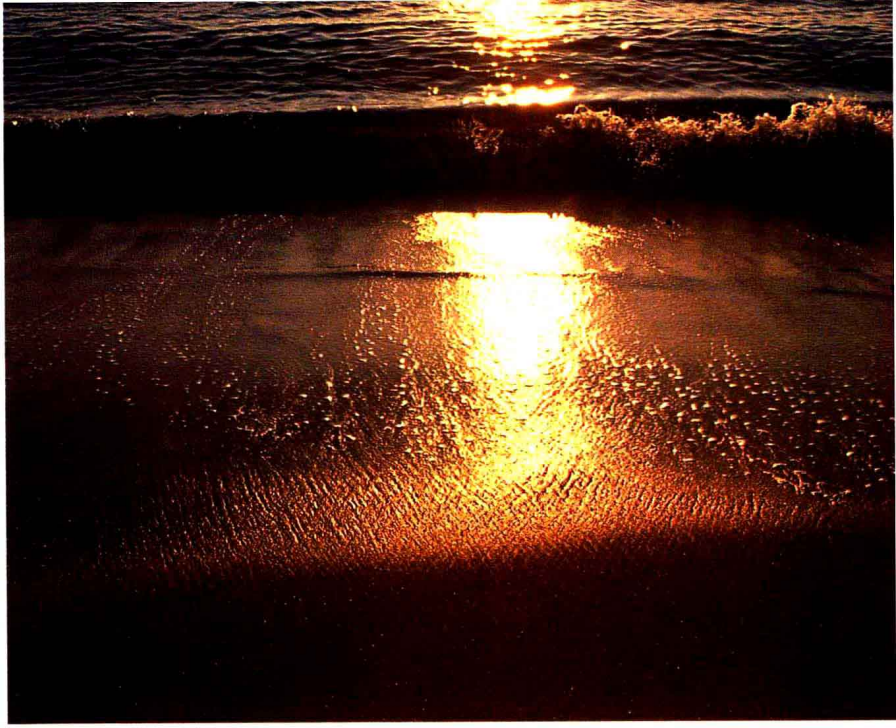
平家一門で平曲を語るに最もふさわしい者はだれであろうか。有資格者は多士済々といえるだろう。たとえば維盛の忠勇な従者与三兵衛（よさびょうえ）などが生きのびて壇浦まで見とどけたとしたら、最もふさわしいように思えるが、その夢はかなわない。清盛の代も含めて四代の平家はみな殺しにあったのだし、生き残った侍たちの多くも壇浦で



は〈手に手をとりくんで、一所に沈みけり〉と書かれているが、ここにことわり書きめいた保留があって、〈其中に越中次郎兵衛、上総五郎兵衛、悪七兵衛、飛驒四郎兵衛はなにとしてかのがれたりけん。そこをも又落ちにけり〉とされている。この面々は杳として行くえが知れないのだ。

そこでやがて夢がかもされ、伝説が生まれる。謡曲にも採られているように、四人の中の一人悪七兵衛が、日向の国に琵琶法師として忽然と現われることになった。おあつらえ向きなことに、悪七兵衛は盲目になっていた。おそらくは源氏の栄える世を見たくなかったから、自から両眼をくじり出したのであろう。つまり多くの琵琶法師と同じ生理的悪条件を余儀なくされて、尾羽うち枯らし、世の人のおひねりにすがって生きていた。彼は歌った。たとえば〈かちに、赤地の錦をもッておほくび、はた袖いろへたる直垂に、萌黄威の鎧着て、足白の太刀をはき、切斑の矢の、其日のいくさに射て少々のこッたりけるを、頭高に負ひなし、うす切斑に鷹の羽はぎまぜたるぬた目の鏑をぞさしそへたる。滋籐の弓脇にはさみ、甲をばぬぎ高紐にかけ〉などと歌った。悪七兵衛にとっては、記憶の中のこうした晴れ姿は、かつては心をときめかせた華やぎ、彩りであった。武装でありながらファ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



ンテジーでありポエジーでもあった。つまり、こうした平家物語の中の飽くなき武装の描写も、もしそれが悪七兵衛の言葉だとすれば、痛切な実感をともなう。器物に対しても感慨は深い。無残な戦さに対しても、執着しつつ厭離しようとする。悪七兵衛は永久に鮮明な悪夢を見続けるのだ。数多（あまた）の琵琶法師たちは、伝説を信じて、悪七兵衛景清の後継者であろうとし、ついにはその亡霊に憑かれて、平家の衰退に立ち合い、その没落の目撃者になりおおせる。たとえ彼らに皆目光はなくても、心眼によって萌黄威の鎧や黄覆輪（きんぷくりん）の鞍を幻視することができるようになる。

しかし、一方で、悪七兵衛の娘が、当時栄える鎌倉で芸妓になっていて、源氏の侍の機嫌を取り結んでいたという下世話な言い伝えも、多くの貧しい琵琶法師の醒めた現実に照応していたのではないか。

那智勝浦の海（和歌山県東牟婁郡那智勝浦町）。当時、那智の海を舟出すれば、補陀落山（ふだらくせん＝観音浄土。インドの南海岸にあり観世音菩薩が住むという山）に達すると信じられ、補陀落渡海が行われた。仏教の普及とともに、当時の人々の浄土への希いも広まった。平重盛（清盛嫡男）の子維盛は平家都落ののち、都においてきた妻子を恋うて屋島の陣を脱出したが都には帰れず、高野山の滝口入道の勧めで那智の海に入水した。近くの補陀落山寺の裏山には渡海者（入水者）の墓がいくつも崩れて苔むしている

平家物語

牧野和夫

I 後白河院

↑（前頁扉）後白河院（一二七～九二）画像。三十六年におよぶ長期院政の座にあって、平家の擡頭、栄華、滅亡の変転に終始かかわりを持った。画像は等身大の法体像だが、損傷が著しい（鎌倉時代、妙法院蔵）

仏涅槃図、部分。南都興福寺大乗院絵所の絵仏師専有父子作。本図は当時、処々方々の寺院に納められていた涅槃絵の基準的なものといわれており、『平家物語』の背景にはこれらの絵の世界がある（南北朝時代、根津美術館蔵）

『平家物語』は、次のように語り始める。

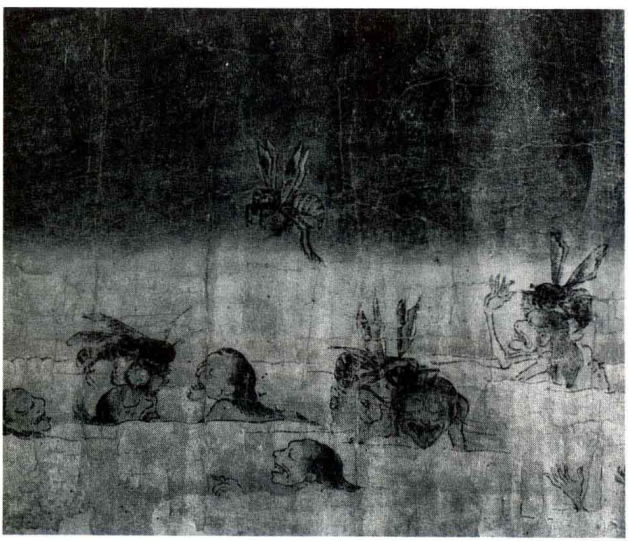
祇園精舎の鐘のこゑ、諸行無常のひびきあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらはす。おごれる者もひさしからず、ただ春の夜の夢のごとし。たけき者もつひにはほろびぬ、ひとへに風のまへのちりに同じ。とほく異朝をとぶらへば、秦の趙高、漢の王莽、梁の朱异、唐の禄山、これらはみな旧主先王のまつりごとにもしたがはず、たのしみをきはめ、いさめをも思ひいれず、天下の乱れんことをもさとらずして、民間のうれふるところを知らざりしかば、ひさしからずしてほろびし者どもなり。ちかく本朝をうかがふに、承平の将門、天慶の純友、康和の義親、平治の信頼、これらはおごれることも、たけき心も、みなとりどりにこそありしか、まぢかくは六波羅の入道前の太政大臣平の朝臣清盛公と申せし人のありさま、つたへ聞くこそ心もことばもおよばれね。

保元・平治の乱（一一五六・一一五九

覚鑁撰「以呂波略釈」冒頭。二行目下から三行目に、「色匂散……盛者必衰」のくだりがあり、花の色の衰え散るさまを「盛者必衰」と解釈している。『平家物語』に先行する院政期の文献（江戸時代写、宮内庁書陵部蔵）

以呂波略釋

有二義句與字是句義又四大分爲二初二句明修因行後两句明諸證果相色匂散生者我
世誰常諸行無色匂散者色者三意一六塵第
可愛諸境謂色美艶語花麗嚴好義故三取五
薀首除六境尾諸色薀色塵故句又二義一六
香塵義色匂散者二意一付喻者花素此各
二通塵
李中葉示西廷之間句者生住假有散者
異實無滅二約法色有二義一順情可愛諸



膿血所（「地獄草子」部分、原家本）。12世紀末近く、後白河院の蓮華王院（京都三十三間堂）宝蔵には多くの絵巻が収蔵され、その中の一つに「六道絵」があった。六道とは衆生が前世の業で赴く六種の迷界で地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上を指す。当時、不安な世情や現実のはかなさから六道輪廻の観念が拡がった。地獄はその迷界の最たるもので、本図は前世に心愚かで汚いものを人に食させた者の堕ちた地獄。膿汁の池は深く、背丈に余る膿汁が眼鼻、口をおおってくる。その上、最猛勝という虫が鋭い針で罪人を襲っている。信心厚い当時の人々の背後にあった地獄への恐怖のイメージが生々しい（平安末期、国宝、奈良国立博物館蔵）

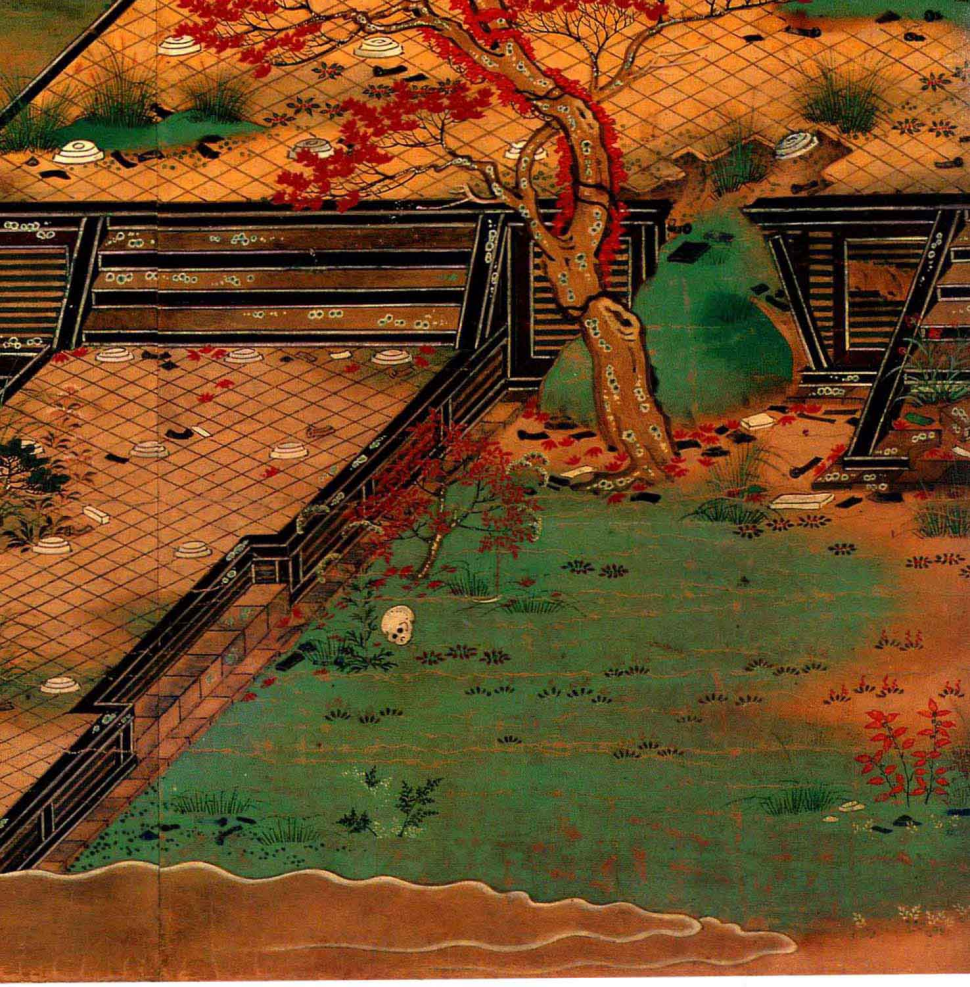
年）から源平の合戦、鎌倉時代へと日本の歴史を画する激動の四十年は、「盛者必衰」の証をくり返し示した時代であった。その枢要に座り続け、六十六年の生涯を全うしたのが後白河天皇（院）である。

＊本巻中の『平家物語』からの引用は「新潮古典集成」による

後白河天皇は、熾烈をきわめた権力闘争がそのただなかから産み出した治天の君であり、「暗愚(主)」にして明賢、放胆にして細心、社寺に対しては信心厚い、まことに謎めいた人物である。『平家物語』の一本(延慶本)は、「後年高運ノ君也」と記し、「叡心ニ背シ青葉ハ風ノ前ニチリハテ、朝章ヲ乱シ白波ハウタカタト消」えたと回顧する。華やかな合戦をくりひろげた『平家物語』の武士たちが、青葉・白波にたとえられていることは、明らかである。

祇園精舎(「玄奘三蔵絵巻」十二巻、部分)。十四世紀初頭の絵所系絵師の筆。インド舎衛(しゃえ)国の都城近くに釈尊とその弟子のために建てた僧坊。三蔵法師が訪れた時には、かつての殷賑はすでに遠く、廃墟と化していた場面。『平家物語』冒頭の諸行無常を伝えて、静かなたたずまいである(鎌倉末期、国宝、藤田美術館蔵)

インドの処々にあった精舎の中で、かつて二大精舎として祇園と並び称された竹林精舎(現在インド・ラージギルにある)の遠望



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com